



このイチョウの木は一本だけで、あたりにほかにはないのですが銀杏が実ります。イチョウの木の受粉、受精はとても興味深いものがありますよ。ぜひ調べてみてください。(サーカス学校、校庭で撮影)

●サーカス学校再開へ

2018年の夏、サーカス学校17年度終了を以て、2011年の福島第一原発事故による放射能飛来時の休校以来2度目となる休校を余儀なくさせられたのは、秋に18年度を迎えるにあたり生徒が2名になってしまい、何よりもナージャ先生の講師料を始め、学校運営資金の確保が困難であったのが大きな理由であった。そこにはサーカス学校を継続していくことに果たしてどのような意味があるのかという根本的な問題が潜んでいて、この問題と、向き合わなければならないのはいうまでもなかった。

生徒が集まらないのは、それだけサーカス技、身体鍛錬を学びたいという若者が少ない状況を表しているのかもしれないが、さまざまな新しい体操競技などが生まれている現在、身体鍛錬、新しい技、競技技術を身につけることに関心のある若者は少なくないと思われるので、サーカスというジャンルへの関心が薄れているという見方もあるかもしれない。しかし世界に目を転じると、ヨーロッパ諸国では新しいサーカスの流れは相変わらず盛んなようだし、ドイツでは新たにサーカス学校が誕生したとのニュースもある。またアメリカに限らないが、サーカスを通して若者の協調を育て社会に参加させるソーシャルサーカスの流れが盛んだという話しも聞く。伝統的なサーカスの復活ではないが、若者のサーカスへの関心度はむしろ高まっているのではないかと思えるのだが。

日本では異常と思われるほど大道芸、特にジャグリングへの関心が高いのだが、それは日本では伝統的なサーカスがさまざまな意味で近代化されないままなので、その世界に飛びこむには壁が高く、それよりも個人で練習ができ、ある程度技術が身につけられるジャグリングやさまざまな大道芸技に、若者が惹かれているからかもしれない。しかもジャグリング、ヨーヨー、そしてけん玉と、その流行は変化してきているものの、いまや大道芸というジャンルは確立しているのだから、そこでの活動、収入が得られるという見通し・希望をもつ若者が増えているのは当然であろう。もちろん、海外のサーカス学校の門をたたく若者がいないわけではないが、海外へ出るというのはそれなりに強い意志がなければ難しいし、親を説得するなど、さまざまな問題をクリアしなければならない。

この点を考えると、例えば日本の体育大学あるいは芸術大学にサーカス科があれば、現在の状況もずいぶんと違ってきているかもしれないが、そのような動きは全くといっていいほど見られないし、この状況が変わるとは思えない。

*

今年7月の発表会前後に、サーカス学校休校の発表をしたところ、多くの会員の方々、特に卒業生から休校を惜しむ声が寄せられ、また労ってくださる方のことばも数々いただいたが、その一方で、高校には行かずサーカス学校で学びたいという若者の声があり、その思いは無視しがたいものであった。そうした声もあって、ひとりふたりの希望者での再開は難しいのだが、もしも数名の入学希望者があればもう一度再開し、ひとりでもふたりでも、身につけた技で活躍できる若者を育てたいという気持ちがくすぶりつづけていた。そんな気持ちだけでサーカス学校を再開し維持できるのかといわれると返答に困るのだが。

来春入学希望者は、短期入学者を含めて現在5名ほど手を挙げている。そして17年間教えてくださったティシェンコ・ナジェイジダ先生はウクライナ・キエフに帰られ、キエフの国立サーカス学校で再び教鞭をとられているため、ぼくらのサーカス学校には戻れないが、卒業生の天野真志とキエフサーカス学校卒業生でナージャ先生の娘のオーリャが指導を快く引き受けてくれた。生徒と先生が揃った以上、これはなんとしてでも再開しようと、来春4月1日スタートを決心した次第である。

暴挙であるにはちがいないが、サーカスの技を学びたい若者がいる以上、なんとかその気持ちに答えていきたいと感じてしまうのは、あるいは自分が関わってきたサーカスの世界が持つ力のひとつなのかもしれない。

(西田敬一)

●トルコでの半年間のショーを終えて (沢入国際サーカス学校卒業生 油布 直輝)

今年4月26日から10月26日の間、モンゴルのサーカスカンパニー“ANGELS”のメンバーとして、トルコのアンタルヤという都市でショーをしてきました。アンタルヤはトルコでも有名なリゾート地で、地中海に面した海岸沿いにはいつくものホテルが立ち並び、夏のシーズンにはロシアやウクライナ、ヨーロッパ各地から多くの観光客がやってきます。そのホテルそれぞれが野外ステージを持っていて、毎晩サーカスやダンスショー、ミュージックライブなどが日替わりで行われています。そのためトルコにはイベント会社のようなショーグループを派遣するカンパニーがいくつもあり、僕らもその中の1つに所属し、日替わりで違うホテルを訪れショーをしていました。

このショーのために4月1日からモンゴルに渡り、クリエーションを行いました。ANGELSは毎年、トルコに複数のグループを送ってショーをしています。今年初めてモンゴル人以外のアーティストをチームに入れてショーを作るということで、僕以外にウクライナの女性が1人参加。といってもその女性は同じグループのモンゴル人の彼女なので、実質は僕だけがまったくの初めまして状態…。英語を喋れる子もあまりなくて、僕に直

接関係することはプロデューサーが英語で話してくれますが、当然クリエイションはモンゴル語で進められるので、大抵は周りの状況をみながらみんなについていくという感じでした。



↑[写真]AKKA HOTELにて、モンゴルサーカスカンパニー”ANGELS”2グループ総勢22名の集合写真。油布君は最前列、中央。

モンゴルの風土なのか、基本的にあまり時間や物事を決めて行動しないし、決めてもその通りにならないので、練習に参加しても「今日僕必要です？」って思うことも結構あり、待ちぼうけをくらうことも多々ありました。かといってちょっとご飯を食べに出かけたら「今どこだ？今から練習だぞ！」と言われたり、しまいには「今日はお客さんを入れてショーを観せる日だ！」と開演30分前に言われたり…。国が違えば、とはよくいいますが、本当その通りだなと実感しました。まあそんなバタバタ感は結構嫌いではないので楽しくもありませんが。

僕らのショーは総勢12名で、フラフープデュオ、ジャンピングロープ、ポールダンス、グループジャグリング、コントーションデュオ、シルホイール、バンキンという構成。モンゴルの伝統的な住居”ゲル”を表す演出で、民族楽器やホーミーなど印象的な音楽を使っていて、モンゴル感満載のショー。僕のナンバーは三味線の音楽に着物風衣装なので、思いっきり日本的でしたが。

トルコに渡ってからはほぼ毎日ショーをこなす日々。14のホテルを日替わりで回り、1日1公演、1日の休みを挟んでまた最初のホテルからという流れだと聞いていましたが、蓋を開けてみれば休みが月1になったり、40日間休みが無かったり。ここではそんな変更は日常茶飯事なんですって。

おまけに今年はトルコリラの急落の影響で、カンパニーが給料を払えないと言い出す月があったり。最終的には支払われましたが、予定通りにいかないことばかりで、なかなかの気疲れ。

*

夏のトルコはとりあえず暑く、今年は最高47度まで上がりました。そこまで上がるともはや暑いではなく痛い。その上吹く風も熱風。そんな感じなのに、ホテル送迎用のバンはクーラーが壊れていたの、ショー前の移動でもう疲れてしまいます。雨はあまり降らず、半年間でスコールが4回。

シルホイールにはこのトルコの環境が少し相性が悪く、太陽の強さでカバーが劣化したり、夜になると湿気でステージ上が結露したようになるので滑るなど、7、8月のショーはかなりストレスを感じながらやっていました。

生活面はというと、生活リズムの違うモンゴル人2人との共同生活に毎日変わることのない朝食。味がなく濃すぎるかのスープに、何もかかってないパスタが出てくる昼食。たまにお湯が出ないシャワーなどなど。まあいろいろ刺激的でした（笑）。↓[写真] 休日にはメンバーたちとよく地中海のビーチへ遊びに行きました。プロデューサー含むオールキャストで出かけた時の集合写真。



ショーに向かう 17 時くらいまではほぼフリーなので、ジムに行ったりみんなでビーチに行ったり映画を見たり。休みの日にはレンタカーを借りてみんなでパムツカレなどの観光地に行ったりして、モンゴル人アーティスト達との思い出もたくさん出来ました。彼らは良くも悪くも素直で、ハートが熱く、仲間意識も高いので、1 度その輪に入ってしまうとお互い尊敬し合える仲になれます。

181 日間。31 のホテルで全 175 公演。休み 11 日。雨によるショーキャンセル 1

日。湿気で濡れたステージでのスリップ 2 回。普通の転倒も 3 回ばかり…。ここでのショーを通して、毎日同じショーをすることの大変さを実感しました。3 ヶ月経つてくるとどうしても自分たちのショーに飽きてきてしまってモチベーションが上がらなくなり、ショーの質自体も下がってきました。彼らもそんなことを感じていたのか、オープニングでいきなり 1 人が喋り出してみんな思わず吹き出してしまったり、演出を少し変えてみたり、役割を変えてみたりと、良いショーをするために、一定以上のクオリティを保つために何をすべきなのか。そんなことを考えていました。これだというものを見つけたわけではありませんが、ショーへの向き合い方は前より変わってきたかなと思います。

その日のショーが自分にとって納得のいくものじゃなくても、お客さんからみればそれは心に残るものだったりします。終演後にお客さんからはよく声をかけてもらいました。結局はやっぱり、そういう声がモチベーションに繋がるし、次もっと良いショーをしようと思えます。モチベーションは自分が良いショーをすることでキープができます。これも 1 つの発見かなと思っています。



↑[写真・左]パムツカレにて。写真が好きなモンゴル人カメラマンが撮影してくれました。[右]ヒエラポリス。円形劇場にて。

また来年も海外公演の話があるので、サーカスアーティストとしてもっと成長できるように経験を積んでいきたいと思っています。はじめての長期公演は自分にとってとても貴重な機会になりました。

●子連れ「大道芸ワールドカップ in 静岡」

様々なアーティストを観るのはもちろん、今年のはじめに大きな話題となった「オン部門ノーギャラ騒動」後の開催ということも気になっていたので、未就学児童（息子です）2人を連れてベビーカーを押し押し、1泊2日で行ってまいりました。

☆「オン部門ノーギャラ騒動」とは；大道芸ワールドカップには「ワールドカップ部門」「オン部門」フリンジ部門」と区分があり、どの区分に出演するかによって条件が異なります。「オン部門」は毎年出演料が支払われていましたが、今年の募集開始時、要綱に「出演料無し」と明記されていたことが発端となり、物議を醸しました。アーティストからの不満、不信の表れか例年に比べると「オン部門」への応募数は極端に少なく、その様子がTVでも報道されたりして、今年の開催はどうなるのか？と危ぶまれた雰囲気も一時あったようですが、運営側と出演者との意見交換会が開かれ、結果的に出演料は例年通り支払われることとなり、国内アーティストからの応募が増えて、結局昨年よりも多い140組ほどになったそうです。全体的にはこれまでと同様のクオリティとなっていたと思います。

11月1日（木）初日の午後、駿府公園に到着し、早速大道芸鑑賞を始めます。この方が終わったら次はあちら、その次はあちら、そして…と意気込む私を尻目に息子たちがぐずぐずし始めました。「おしっこ出る」、「なんか気持ち悪い」、「お腹空いた」、「お腹痛い」、最後は「お家に帰りたい」×2名分。こんなのはもちろん想定内の範囲です。母ちゃんは体力的にも精神的にも覚悟して来ています。トイレに連れて行き、食べ物を与え、ホテルに一時退散したりしました。けれども「母ちゃんは自分の好きなサーカスとか大道芸とかばかり見てずるい！僕たちはつまらないのに！」と、大道芸鑑賞の最中に観衆の中心で叫ぶとは…なかなか手強いです。

こんなときは、プレミアムステージ！こちらは劇場で6組ほどのアーティストを続けて観ることができます。座席に着くと子どもたちはいつの間にか寝ていて、ショーが終わるまで起きませんでした。椅子に座って2時間ほどのショーを鑑賞しきることができました…。このことに嬉しくて感動してしまいましたが、以前だったら、そんな視点はありませんでしたし、それどころか「大道芸」のフェスティバルだというのになぜステージでショーを行うのか？な～んてつまらない批評に参加すらしていたかもしれません。今はひとこと、「助かりました。おかげさまで楽しめました」です。いやはや、勝手なものです。

屋外でのパフォーマンスに関しても、海外のサーカスアーティストらは自分たちの演目をシンプルに披露していて、10分に満たないほどの短さだったのですが、これも助かりました。以前の私ならば物足りなさを感じ「外で行うサーカスアクトであって大道芸とはいえないのではないかと、問題定義する風に不満をぶつけていたかもしれませんが、未就学児たちが「ちゅごいねえー」と集中して見ているうちに終わるので、ちょうどよかったです。「公園で世界のサーカスアクトが見られる。これはこれで良いじゃないか」と素直に思います。「助かりました。おかげさまで楽しめました」。いやはや、勝手なものです。大道芸やサーカスを合言葉に集まった様々な状況の人たちの多くが楽しめる、1年に1度のフェスティバル。今後も良い形で続いてほしいと願っています。

■鑑賞メモ



☆デュオ・ディスティニー（ポルトガル、ポーランド）[左写真・上]；男女ハンド・トゥ・ハンド。今年の「第39回シルク・ドゥ・デュマン」出場。ダイナミックな技と柔軟性を組み合わせた技、ダンス、ドラマチックなラブストーリーが見事に融合し、素晴らしい肉体で奏でられる演目は、まさに芸術の域に達していました。



★バラダ ストリート (イギリス、キルギス) [左写真・上]; 「おぼかな英紳士」リチャードとキルギスタンのストロングマン・ジュリがつくるコメディショー。ウクレレ片手にハンド・トゥ・ハンドやパントマイムなど様々な要素を取り入れたショーは、色々と姿勢を変化させながら演奏を続けていきました。

★ハン チャオ (台湾); ディアボロ。「第38回シルク・ドゥ・デュマン」出場。途中、コマ1つとスティック2本、コマ2つとスティック2本を操っていました。スティック、ヒモ、コマという道具で、動きも技も限定されそうなものですが、よくこれだけヴァリエーションを広げられるものだなあと素直に感動しました。

☆メーガン&ローレン (アメリカ); 女性デュオトラピーズ。女性らしい可愛い雰囲気とは裏腹に、ひとりが落下し、ひとりがブランコの上から支えるというダイナミックな技を次々と展開していきます。コメディ調にしており、ときおりフフッと笑えるので飽きませんでした。

★ケロル (スペイン); 「オレのセカイへヨウコソ！」(英語では”Welcome to my head!”) から始まる彼の世界は、ビートボックスとジャグリングを組み合わせたパフォーマンス。力強いのですが繊細で、様々な音を奏でる彼のパフォーマンスは、人間の可能性を教えてくださいました。皮膚の中に隠れているエネルギーが溢れ出ている、まさにエンターテイナーという方でした。昨年は銀メダル、今年はチャンピオンに輝きました。



☆テアトロ パヴァナ (オランダ、ギリシャ) [左写真・下]; カバと飼育員の練り歩き。リアルでかわいいカバに子どもたちが「カバだー！」と声をあげて釘付けになっていま

した。

全体を通して感じたことといえば、もはや常識だと思いますが、サーカスや大道芸というジャンル分けをされてはいるものの、ほかの様々な要素を取り入れ、混ぜ合わせながら、それらを融合させることに見事に成功しているアーティストが多いということです。「ジャンルの境界を超えている」とか「境界線がぼやけている」というよりも、境界という概念がそもそもない世界のように感じます。アーティストらは「境界を超えよう」と努力しているのではないという感じがします。では何をを目指しているのか、と問うと「人間」と返ってくるのかなど。先生に教えられたとおり、先輩がやっていたとおりの、代々受け継がれているいわば雛形、伝統といえるものがサーカスのそれぞれの芸、演目に存在するかと思います。例えばモンゴルで、コントーションのパフォーマーやたまごは何百という数いますが、その子の演技を観れば先生が誰かたいていわかるものです。そのような伝統的なやり方を望むパフォーマーは、少なくなってきたのかもしれませんが。かといって、伝統的で洗練された芸や技がないがしろにされているのかということそうわけでもありません。昨年の大道芸ワールドカップチャンピオンに輝いたのは、中国雑技の張海輪さん(変面・七丁椅子ほか)です。

様々な要素を織り交ぜることが良しとされる背景には、どの表現方法を学び、どんな道具を選び、ショー構成や演出をどのように行うのかということに、その人の「人間味」「人間性」「その人そのもの」というものがより濃く現れるから、ということがあるのかなと思っています。それが伝統的なサーカスと異なる面白さだと感じられるのではないかと思います。もちろん、色々な要素を学んで混ぜ合わせたショーとひとくちにいつても、それぞれの要素をひとに見せられるレベルまで洗練させるのは時間がかかりますし、その創作過程も簡単なことではないと思いますが、アーティスト自身の「自分は何者なのか」という、アーティストに限らず人類が持つ疑問に対する欲求がより満たされる何かがあるのではないかと感じるところがあります。ある知り合いの若いモンゴル人コントーションистが「私たちに仕事の依頼がくるとき、たいていは『モンゴル人のコントーションистがほしい』といわれますが、私は『コントーションистのAさんがほしい』と言われるようになりたいんです。とはいっても、レベルやできる技がほとんど同じたくさんのモンゴル人の中から私が選ばれるために、何をした

らよいのかはわからないから、これからコンテンポラリーダンスを習ってみたり、ほかの芸術を習ってみたりして、作品を作って公開していこうと思っています。」と話していたのを思い出しました。

創作、新鮮、そして心の琴線に触れるような表現を行うサーカス。一方で、信じられないレベルに至るまで身体訓練し、特異なことや奇異なことをしては観る人の脳みそをこじ開けて一気に押し広げてくれるような「サーカス」。どちらも「ああ人間で良かった」と感じさせてくれるところが、私は好きです。今回の大道芸ワールドカップではどちらも観ることができました。皆様、ありがとうございました。（長屋 あゆみ）

☆大道芸ワールドカップ in 静岡；「人を元気にする。まちを元気にする。」をスローガンに、1992年に初回が開催されてから今年で27回目を迎えたパフォーミングアーツフェスティバル。4日間に渡り静岡市内の公園、商店街、劇場、そして道で、国内外のアーティストら約100組が自らの芸を披露する。「アーティストの世界一を決める」コンペティションではチャンピオン、シルバークラウン賞、ブロンズ賞が与えられる。尚、今年の総来場者数は143万人とのこと（公式サイト発表）。■公式サイト

<http://www.daidogei.com/>

サーカス公演情報

★木下大サーカス

- 大阪公演 公演期間 2018年12月8日（土）～2019年3月11日（月）
- 休演日 毎週木曜日と12/12（水）、12/31（月）、1/9（水）2/20（水）。但し1/3（木）は開演。
- 会場 大阪駅前うめきた 特設会場 ●電話 大阪公演事務局 ☎06-6359-4500
- ウェブサイト <http://www.kinoshita-circus.co.jp/>

★ポップサーカス

- 富士公演 公演期間 2018年12月8日（土）～2019年2月3日（日）
- 休演日 毎週水曜日と12/30（日）、12/31（月）、1/8（火）。但し、1/2（水）は開演。
- 会場 富士総合運動公園 大テント（多目的広場・静岡県富士水泳場隣）
- 電話 富士公演事務局 ☎0545-30-6888 ●ウェブサイト <http://www.pop-circus.co.jp/>

★ハッピードリームサーカス

- 広島公演 2018年11月22日（木）～2019年2月12日（火）
- 休演日 毎週水曜日と12/31（月）。但し、1/2（水）は開演。 ●会場 「広島みなと公園」 大テント特設会場
- 電話；広島公演事務局 ☎082-254-8867 ●ウェブサイト <http://www.dreamcircus.jp/>

その他公演情報

★沢入国際サーカス学校卒業生出演 人形遣い×道化師公演『CorGLOOVE!!コルグループ!!』

沢入国際サーカス学校卒業生で道化師のサクノキ君と、人形遣いの長井望美さんによるユニット”コル・グラス・フールズ!”。 ”ガラスの心臓を持ったおばかさんたち”による舞台公演、第二弾です。 ●ウェブサイト <http://corglassfools.wixsite.com/home>

- 日時 2019年2月2日（土）16:30開演/16:00開演、20:00開演/19:30開場
- 料金 前売；一般2,000円+1drink /子ども（中学生以下）1,000円+1drink 当日；+300円
- 劇場 Café Muriwui（カフェ・ムリウイ）（小田急線「祖師谷大蔵」駅徒歩5分）
- ご予約方法 ①お名前 ②ご希望回 ③人数（大人 or 子ども） ④メールアドレスをご記入のうえ、c.g.fools@gmail.comへメールをお送りください。受付メールの返信をもってご予約完了となります。



